

# インド禅定林大本堂が落慶

法要に日本から230人 現地信者は10万人



インド禅定林大本堂全景（インド・マハシュトラ州）

は天台宗の僧が約百三十人、一般信者約百人の総勢二百三十人が日本より参加、インドからは約十万人の信者が参加した。

落慶法要は探題・森川宏映大僧正が導師となり、また、本尊及び脇伝教大師像とアンベドカル博士像の開眼法要は、毘沙門堂門跡門主・叡南覚範大僧正が導師となってそれぞれ法要を厳修した。併せて、サンガラトナ・法天・マナケ師の住職晋山式を執り行った。

当日、「百僧供養」も行われ、出席した天台宗の僧百三十人による読経がインドの総本山に、朗々と響き渡った。

また、日本をはじめ諸外国からも多くの参拝者が掛つけたが、参拝者にそれぞれの地域の特産物を一品ずつ持参してもらい、「百味供養」として仏さまにお供えた。

禅定林大本堂は、大乘仏教修学、インド・日本をはじめ諸外国からの仏道修行者を受け入れ、菩薩僧を育成、インド仏教徒の精神的象徴となること、諸宗教の方々の靈魂の交流の場となることなどを趣旨に建立を発願したもので、二〇〇五年二月に地鎮祭、二〇〇六年七月に上棟式が執り行われ、今度の落慶法要となった。

インド禅定林大本堂の落慶を記念して、住職のサンガラトナ・法天・マナケ師が、『波乱万丈！インドの大地に仏教復興 日本の心をもつインド人仏教僧・奮闘記』（一八九〇円・税込）を春秋社から発行した。

マナケ師は一九七二年、九歳のときインドから来日し、堀澤祖門師（現叡山学院院长・泰門庵住職）の徒弟

## 落慶記念し半生記を発行

として得度、比叡山回峰初百日を満行するなど比叡山での厳しい修行と研鑽の日々を送り、二十三歳で仏教復興のためインドに戻り、現在は、インド禅定林住職、パンニャ・メッタ・サンガ会長、パンニャ・メッタ協会日本委員会理事長としてインド仏教復興に命を賭けている。

マナケ師を育てた堀澤師は、電話取材の中で「マナケ師は年齢も四十五歳となり、インドに帰って二十二年になる。その間の苦労は並大抵ではなかっただろう」と語っている。本書はインド人僧の破天荒で前人未踏の半生記である。

